

(国語)

**「学びを楽しむ子に育てる」
～本に親しむ活動を通して～**

大阪市立東淡路小学校

1. 研究主題設定の理由

本校では、教育目標を「強く、正しく、朗らかに生きる子どもを育てる」として、心身ともに健全な子どもの育成を目指して日々の教育活動を進めている。

研究教科に、昨年度より国語科を取り上げ、研究主題を「学びを楽しむ子に育てる」として研究を進めてきた。本校の課題として、学習意欲が低く、国語科の学習に対して主体的になれない児童が多い実態があった。そこで、児童にとって楽しいと感じられる授業の積み重ねこそ、学習意欲を向上させ、主体的に学ぶ姿につながると考え、学びを楽しむ具体的な姿として、「本に親しむ子ども」の姿を思い描いた。言語力の基盤となる言葉、本に児童が親しむようにするところから取り組み、読む本の種類を広げたり、本を読もうとしない児童が本に親しめるよう工夫をしたりして、本好きの児童を増やすことこそ、現在の本校に必要なことであると考えた。

2. 研究の趣旨

昨年度、国語科の中での読書活動や朝読書、読み聞かせなどを研究として進めてきた。8月と2月に行った児童アンケートの「読書は好きか」の項目においては、3.8ポイント→4.2ポイントと読書に興味を持つ児童が増える結果となった。しかし、次のような課題も明らかになった。

- ・読書をする機会は増えたが、読む本の種類が同じものに限定されている。
- ・自分が読んだ本を周りに伝えたり広げたりすることが不十分であった。
- ・児童の書く力や話す力に個人差が大きい。ワークシートや発問、掲示物などの工夫を深めていく。
- ・グループ活動はあったものの、児童相互が対話的に学び合う場としては不十分なところもあった。グループの人数、構成、グループ活動の中身について研究を深めていく。

今年度は、昨年度の成果を生かしつつ、課題にせまる指導の工夫に取り組み、よりよいものにする実践を進めていくことにした。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点・内容を以下のように設定した。

<研究の視点>

視点① 主体的な学びができているか

- 低学年「楽しんで読書」中学年「幅広く読書」高学年「自分の考えを広げる読書」を通して、思いや考えを伝え合おうとする態度を養う。
- よりよい考えにするために「話す・聞く」活動を行い、交流活動をする。

視点② 対話的で深い学びが実現できているか

- 児童全員が伝え合う「中身」を持つための工夫をする。
(本の内容や作者・筆者の思いや考えを捉える+自分の考えを持つ)
- 児童が伝え合うための「場」の工夫をする。
(話し合いの形式、目的意識と相手意識を明確にした言語活動)

- 児童が習得する「言葉の力」を明確に設定し、習得するために言語活動を工夫する。

<研究の主な内容>

① 第Ⅲ次を見通した言語活動

- 国語科学習の中で、第Ⅲ次の言語活動を設定する。教材を契機に関連図書を読み、文字あるいは音声で表現する。第Ⅰ次の学習時に第Ⅲ次の活動の見通しを持てるようにすることで、学習の意欲付けを図る。以下に各学年が実践した教材・言語活動を示す。
 - ・1年「サラダでげんき」「おしえてあげるねカード」を書いて、教えてあげたいことを伝える。
 - ・2年「ニャーゴ」教材文での音読を生かして、グループで選んだ本の音読劇をする。
 - ・3年「パラリンピックが目指すもの」競技の本を読み、要約してリーフレットにまとめる。
 - ・4年「走れ」選んだ物語の中から気持ちが変わる場面を見つけ、リーフレットにまとめる。
 - ・5年「注文の多い料理店」宮沢賢治作品の表現の工夫を見つけ、「紹介カード」にまとめる。
 - ・6年「プロフェッショナルたち」仕事をする人に関わる本を読み、生き方や仕事に対する姿勢についての考えを「セブンルール動画」にまとめる。

② 読書活動を入れた年間指導計画の作成

- 幅広い読書を推進するため読書の年間計画を作成し、テーマ読書を進める。
- 東淀川図書館の集団貸し出しを利用した教材文との並行読書を行い、各学年で第Ⅲ次を見通した言語活動を設定する。

③ 読書活動の充実

- 朝読書の推進および教員・地域による本の読み聞かせ

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- 第Ⅲ次の言語活動を設定したことで第Ⅱ次での指導事項が明確になり、そこに焦点を当てた指導を行うことができた。相手意識や目的意識が高まり、児童が多くの本を手にとるようになった。
- 1年生では昨年度の言語活動をもとに今年度の言語活動をより深めて研究するなど、昨年度の研究成果を生かすことができた。
- 全校児童読書アンケート結果では、「読書は好き」「この1か月間に読んだ本の冊数」のいずれも肯定的な回答の割合が上昇し、読書嫌いの児童が減り、多読も進んでいることが確認できた。
- 担任外の教員、特別支援学級の教員も学年チームに所属し、2年間の研究を続けたことで、学校全体の研究として取り組むことができ、教員同士の学び合いを実現することができた。

(2) 今後の課題

- 児童が学びを振り返る時間をより大切し、自分の学びを客観視できるようにする。
- 読解力に個人差が見られるので、言語活動の充実・対話的な学び・多読をより進める。
- 市立図書館への選書依頼を工夫する。